

正人氏は少年ながら切齒扼腕した。

博多に引き揚げたのは昭和二十年十一月二十日、故郷を捨てた父は山口県には行かず母の生家佐賀を訪ねて落ち着いた。父は雑魚の行商、弟は自動車修理見習い、正人氏はニュージールランド軍のキャンプに常備勤務、二十二年七月兄が復員、二年半ぶりで一家七人がそろった。明けて二十二年二月兄の宏氏は柳井機関区の機関助手に採用され、正人氏は同年四月山口大学臨時教員養成所を卒業して教諭、校長の栄職を担う。正人氏は親孝行を實踐、兄弟姉妹の情愛のゆたかさ特に兄おもいの強靱な心根の深さに敬意を表する。

(拙引揚者団体全国連合会)

副理事長 結城 吉之助

語り継ぎ伝えたい願いと
遺しておきたい祈り

山口県 宮田 榮 一

—苦節四年有半のシベリア強制抑留の姿—

私は朝鮮京畿道仁川府で出生した。三歳のときに両親を亡くし、祖父母と三人で生活することになった。幼いころに両親を亡くしたので兄の姿も覚えていない。温かみのあるそして、ぬくもりのある父母との暮らしを持たないままに育ってきたことを思い出すととてもつらい気持ちでいっぱいであった。

両親に成り代わって祖父母はよく私の面倒をみてくれていたことを今でも思い出す。

小学校へ入学するときも、他の子供は母親と手をつないで校門に入っていくのに、私だけは祖母に手を引かれて校門をくぐって行った。

当時、祖父母は薬局を営んではいたが、経営が思わ

しくないのが子供の私にもわかった。

そこで、祖父母は住みなれた家屋（約三十坪）を朝鮮の方に貸し、薬品類などは売却した。

入学以来、私の学費などや、店の諸経費、生活費のすべてを祖父母がきりもりしていた。

私が小学校の三年生の夏休みに祖父母と私の三人は、伯父のいる朝鮮黄海道海州港に移り住むことになった。そして九月に海州上町尋常高等小学校に転入した。海州港から海州までは汽車通学をした。

当時、伯父は海州港で造船所（木造）を経営し、船大工の職人たちは十数人もいた。

一方、祖父母が朝鮮の方に貸した家賃が時々途絶えるので度々催促していた。送金してくる家賃を貯めながら海州港でも薬局を経営していた。祖父母はいつも私にこう言っていた。「両親のいないお前を見ているとかわいそうでたまらん。だけど、からだには気をつけて勉強するんだよ。お前にやる気があれば家財道具を質屋に入れてでも上の学校にあげてやる」といつも私は励ましてくれていた。

私は子供ながらも高等小学校の二年生を卒業したら、実社会に出て働くことが祖父母や伯父に対する御恩返しにもなると考えていた。

ある日、伯父と祖父が私にこう言った。「学資の方はわしらが出してやるから中学校に行け」と。この言葉を聞いてありがたい気持ちでいっぱいであった。私は泣いてよろこんだ。中学校を受験し合格できた。

海州港から中学校までは片道六キロあった。学校までは自転車通学である。その自転車は伯父の使いふるしの中古であったが、愚痴一つ言わずにただありがたいという気持ちでいっぱいであった。伯父は血縁関係であったのでよくしてくれていたが、継母にも当たる伯母はささいのことで毎日のように私を責めたり、いじめたりしていた。思い余って私はこれまでのことなどをすべて祖父と伯父に話した。

すると祖父と伯父は私にこういつてきつくしかった。「そんなにもお前は心の弱い男か」「もっと心の強い男になれ。辛抱するんだ」と。

しかし、伯母はいちいちきつく当たり散らした。伯

母を恨む心情が高まってきて一時はぶんなくつてやろうかとも思ったが、義理なのだから仕方がない、我慢しようと思ふっている自分の気持ちの子供ながらも抑えたことを今でも思い出す。祖父母はその後も薬局を続けてはいたが商売はうまくはいかなかった。

私は休日には、きまつて海州で繁盛していた朝鮮人が経営している問屋を回りながら、少しでも安く薬品を仕入れる仕事の手伝いに自転車走らせていた。問屋を尋ねる道すがら涙を流していた。こんなとき、両親が生きていてくれたらなあ」と思うといたたまれない気持ちになっていた。時は流れて私は中学校を卒業し、京城師範学校にすすんだ。その後、昭和二十年四月、陸軍歩兵第七十七連隊補充隊に編入された。貧乏であったので、入隊時には伯父の国民服を借りたが退めたときには返却してはくれなかった。

厳しい軍隊生活・暗号手の猛訓練の日々

入隊後軍服に着替えさせられた。当夜は歓迎を受けたが、翌朝から暗号手としての厳しい訓練が始まった。他の兵士の起床時刻は午前六時であるのに我々暗号手

だけは午前四時には起床させられ特訓の連日であった。連日の猛訓練でむごい目に遭わされながらも黙々と続けた。それはモールス付号の暗記と、発信、受信の訓練であった。今の脳裏から離れない。

モールス付号は、イ、ロ、ハの順であった。

イ イトー (伊藤)

ロ ロジョーホコー (路上歩行)

ハ ハーモニカ (ハーモニカ)

ニ ニユウヒゾーカ (入肥増加)

ホ ホーコク (報告)

以下、紙面の都合で省く。()内は暗記の一方法
記憶したモールスを的確に発信するために親指、人差し指、中指で机上を打つ。次は模擬発信機で発信訓練を行う。間違えると手の甲を青竹で何度もたたかれた。私だけでなくほとんどの者がたたかれた。次に暗号書と、区別付乱数表が各人に手渡された。そしてこれを活用しての訓練が厳しかった。

近距離は有線、長距離の場合は無線で発信・受信を行い、訓練は早朝だけではなく、就床時刻の直前まで

も続けさせられたのである。

昼間の演習も連日続いた。模擬爆弾を小脇にかかえての対戦車撃滅の訓練であった。正に体当たりの肉弾訓練である。敵の戦車を想定して丸太棒をかかえて戦車のキャタピラをめがけてそれを投げこんで逃げる訓練をした。まるで人間爆弾であった。既に戦車はジグザグに走ってきている。タイミングを見計らって丸太棒を投げこまなければならない。下手をすると味方の戦車の下敷きになる。危険きわまりない捨身戦法であった。

時には部隊外にある丘に登って更に士気を鼓舞するために部隊歌を歌う日もあった。疲れ果てての就床なので、その就床ラップの音色も我々にはあわれに聞こえた。入隊直後から古兵や、下士官がとても怖かった。鬼にでも出会ったような気持ちを持っていた。

ある日、ある下士官がこう言った。「いいかよく聞け。貴様はあとわずかで俺たちよりも階級が昇り、幹部候補生になるのだろう。今のうちに半殺しの目にあわせてやるからな」と言つてののしつた。この言葉を

聞いた私は肩をいからせている軍人の中にも何とあわれな人間がいるものだと思った。「この野郎、鬼畜生」と一時は思ったが、祖父母がいつか言ってくれていた「我慢するのだ」の言葉を思いおこして一切口答えはしなかった。

今述べた下士官がいた反面、心の底から部下思いでしかも人間愛にあふれた下士官もおられた。その方はN曹長さんとi軍曹さんであった。ある日、その方たちが私に、「君は我々下士官とはちがうのだ。早く幹部候補生になり、だから尊敬される立派な人間となつてほしい」と言われたときは涙を流した。この励ましの言葉、いたわりのある真心は今も忘れてはいない。

内務班の中には朝鮮の方もいた。私が朝鮮で出生したこともあって、私にだけは自分の胸に秘めた悩みごとなどを包み隠さずによく打ち明けてくれていた。そして訓練時にも私のそばにいて決して離れようとはしなかった。彼は結婚後に入隊し、妻を思う気持ちが私にはよくわかつていた。内・鮮・一・体・と・か・い・う・美・し・い・言・葉

によって連日の厳しい訓練が続いた。

昭和二十年六月疲労困憊の末に入院。余りにも厳しい過ぎる訓練と演習がたたって、体調をくずしてしまつた。その上、内務班内の不衛生も重なって発熱した。

どうにかして頑張らなくてはならないという使命感や、責任感は堅持していたが、崩した体調は元には戻らなかつた。覆いをしたリヤカーで陸軍病院に運ばれた。

覆いをされた車の中の私は高熱でうなされていた。ついにはあの恐ろしい法定伝染病である、発疹チフスにかかつていたのである。私一人だけではなく、多くの戦友がこの病魔に冒されていた。皮膚には淡赤色の発疹が広がって全身に及んだ。そして高熱が連日続き体全体がもうろうとしていて、とても生きている自分ではなかつた。入院中に死亡した兵士もいた。その中には応召兵の姿もあつた。

入院中にN曹長さんと、i軍曹さんが見舞いに來られて、「しつかりせよ。貴様は俺たちと違つて若さがある。心配せずに早く治せ。必ず治すのだぞ」と勇氣と希望を与えてくださった。ありがたいぬくもりのあ

るこの言葉を聞いたのは入隊後初めてのことであつた。

そしておもむろに、「俺たちは今より戦地に征くがお前にはその行き先は言えない」と言われた。「私も一緒にお供させてください」と頼んだ。すると「そんな貴様のからだで一体何ができるのか。また征く機は来る」といわれた。そして起き上がっている私の体をそつと手を添えてベッドに横にしてくださいました。

④号作戦訓練へ出動し祖父母と再会

昭和二十年七月、退院後、この作戦訓練の命令が出た。その地点は奇しくも海州であつた。祖父母と再会できる喜びがわいた。

この訓練は一カ月足らずであつた。そしてここでは原隊との交流通信であつた。祖父母と再会できたが詳しい話などをしている時間の余裕はなかつたが、祖母が私の好きなオハギをつくってくれた。とつてもうまかつた。

私はふと、もう一度祖父母と面会できたらいいなと思つた。祖父母は私に、「体には十分気をつけるんだよ。わかつたな」と言つた。この言葉を聞いた私は

むしろ祖父母の体のことが心配でならなかった。

昭和二十年八月十三日に一時帰郷の命令

上官が、「四十八時間以内に原隊に復帰せよ」とのことであった。この命令を聞いた途端、なぜ再度帰郷させるのであろうかと不思議に思った。(か)号作戦訓練後まもない時機にと思ったが、一目散に海州に飛んで帰った。

家に帰ったとき、祖父母の姿を見るなり体調がよくないことがわかった。しかし、私を温かく迎えてくれてとても嬉しかった。祖父母は私にこう言った。「もう今の分だとこの戦争は終わったのと同じだ。あとはゆっくりして、兵隊とこでの疲れをとるのが一番大切なことじゃ」とくどいほど言った。もう祖父母は既に日本は降伏し、終戦を感じていたのであるうか。私は祖父母に原隊に復帰しなければならぬことを、いつ告げればよいのか途方に暮れていた。祖父母は私をじっと見据えてこう言った。

「何かわしらに隠していることがあるう」と突き詰められたとき、私の胸の中ははり裂けんばかりであつ

た。私はいつまでも隠し通せるものではないと思ってた。たった一言「戻らねば」と答えた。すると祖父母は、

「何、戻らねばと……。もうこの戦争は終わったのと同じなのに」と何度も言いながら両手で床を叩きながら大声を出して泣いた。その姿をもう何十年も経った今でも思い出す。別離の時間が迫ってきた。「足腰が痛むがあの丘の上までお前を見送る。これがお前との別れになるやもしれん。くれぐれも体だけは大事にして戻ってこいよ」と私に言った。この言葉を聞いた私は目を閉じ、手を合わせてどうか神さま仏さま御慈悲をください。御加護をください」と祈り続けた。丘の上でお互いに手を振り続けながら涙と涙で別れた遠いあの日のことを今も覚えている。

終戦・武装解除と収容所での生活の姿

昭和二十年八月十五日に平壤（北朝鮮）の部隊で終戦。同年八月二十六日武装解除した。

九月の初めに三合里の収容所に移送

この収容所で三八式歩兵銃、葉莢、背囊、日本刀などをすべて押収されて丸腰になった。

暗号書と區別付乱数表は焼却してしまった。約一月間三合里の収容所で生活した我々は、十月八日に北朝鮮の興南に貨車で移送された。

興南の捕虜収容所で約二カ月ぐらい困窮な生活を強いられたのである。もうそのころにはソ連軍が進駐していた。そして数多くの装甲自動車までも配備されていた。我々の部隊は軍事物資や、武器類などを船積みする作業を連日続けさせられていた。食料事情もわるく、数多くの患者があとを絶たなかった。

貨物船に乗船してシベリア強制抑留

昭和二十年十二月末に興南港出港。貨物船の船倉に全員が閉じ込められた。貨物船の小窓から外を見ると左舷に沿海州をたどりつつ一路北上を続けた。船倉には豆電球があるぐらいで暗くて悪臭が漂っていた。便所に行く折でも外の景色を見ることがさえも許されなかった。甲板上にはソ連兵らしい歩哨の姿を見た。接岸するやいなや歩哨が「早く降りろ」とどなった。「ここはどこだ」と問うと「ナホトカ」と答えた。ソ連領に連行された我々は力を落とした。もう既に混成部隊

や、関東軍の兵士たちが集結されていた。ナホトカ港では吹きすさぶ平テントの中で、まっ裸にされて検疫を受けた。DDTを全身に吹きかけられた。素っ裸にされた我々は凍りつくような寒さのために体全体に激しい痛みが走った。しかしどうしようもない。兵士の多くが「こんな仕打ちを受けるぐらいなら舌をかみ切つて死ぬ」とまで言った。兵士までも「いけにえ」に差し出されたのだと思うと我慢できなかった。検疫を終えた我々の部隊はこの日の夜、貨車で移動させられた。

シベリアの十二月末の寒さは、到底口では表現できない凍りつく激しい寒さであった。我々は貨車の中で、伏せて互いに体をよせ合つて少しでも寒さをしのいだ。貨車の換気孔から雪が吹きこんでくる。貨車の床には敷物もなく鉄板である。正に地獄さながらであった。何と情容赦のない非人間的な行為に對してみなが恨んだ。一晩中、広野や森や林の中を走り続けた貨車は翌朝、アルチョムの炭坑の町で下車を命ぜられた。下車するときは耳や手、足先までしびれて感覚さえもなか

った。我々兵士の全員に悲憤の情がこみあげた。このむごい仕打ちを五体で体験したのであった。

昭和二十年十二月末炭坑に着いた翌日から炭坑での強制労働をさせられた。北満の兵士や、関東軍の兵士たちは既に炭坑労働をしていた。炭坑に向く前に収容所の門の前に集結して労働歌を歌う。音頭をとる者はチター地方から派遣されて来たNという日本兵士であった。それが終わると日本兵士が櫓をとばす。民主化運動への過程とはいえ、ノルマに追われる連日の強制労働であっただけに彼らの言動には心服できなかつた。このようにして日本兵捕虜同志の間にも、日増しに信頼感や友情もなくなつて憎しみさえも持つようになっていった。生涯消えない深い溝を残すようになって悲劇を今も思い起こしている。

炭坑労働は三交代制で、私は先山の探炭夫として労働を強いられていた。靴下ではなくパルチャンキである。これはタオル大の布をそれぞれの足に巻きつけて炭坑用のゴム靴をはく。

服装はソ連製の上下服であった。食事の主食は黒バ

ンで探炭夫は七百グラムであった。それを朝と昼とに分けて飢えを凌いだ。陸上（地上）労働者は三百五十グラムの黒パンしか与えてもらえなかつた。宿舎は日本軍が使用してきた濃緑色のテント内での生活であった。冬期であってもこのテント暮らして暖房用のストーブが広いテントの中に二個しかなかつた。寒さの中での就床は本當につらく寝つかれなかつた。ベッドとは全くの名ばかりで、丸太を組み合わせて作ったものだ。床の部分は板一枚。寝具は一人分たったの二枚の毛布だけであつた。上下段にそれぞれ二人ずつ寝る。深夜は深々と冷えこんで零下三八度以下までに下がる。収容所（ラーゲル）の周囲には何重にも鉄条網が張りめぐらされ、丸太で組み立てた火の見やぐらが随所に設置されていて、ソ連の歩哨が自動小銃を構え交代しながら日本兵の逃亡を阻止していた。

炭坑内でのガス爆発や落盤事故で不慮の事故死をした兵士たちも少なくなかつた。連日の炭坑内の粉じんで気管支や、肺をやられる。

私は先山の探炭夫をしていたので咳と痰が始めた。

微熱が連日続いて体全体がだるくなり、体力もなくなり次第にやせていった。体調をくずした私は、ソ連の軍医の診察と検査を受けた。この検査を受けた兵士は二十数人もいた。その結果すべての者が肺結核にかかっていた。このとき、「私はもう駄目かなあ」とも思ったが、病に勝とうと誓った。ソ連の軍医は多分感染を恐れたのであろう。早速、患者は隔離病棟に入院させられた。約二カ月足らずで咳も痰も微熱もなくなり退院させられた。

昭和二十二年一月、退院後、私は地上での労役森林伐採労働に服した。採炭夫の労働より多少なりとも軽労働であろうと予想した。ところが全く予想外れで、更に辛く過酷な重労働であった。実際に体験した者でなければ到底わかってもらえないと思うが、シベリアの冬の寒さは格別で酷寒の中の労働は体全体に痛みが走るといっても過言ではない。衣服はソ連製の上下服で帽子は戦闘帽、靴は防寒用ではなく編上靴であるため足の先まで痛んだ。雪深い山中に入ると六十センチから八十センチぐらいも雪が積もっている。雪を

かき分けて急斜面をよじ登る。腰をおろす場所の雪を取り除いて座布団がわりに上衣を脱いで座る。二人が向き合って鋸を握り樹木を切る。座布団がわりにした上衣は綿の中まで雪がしみこむ。その上衣は夜ストープで乾かしたが十分乾いてない。切り倒した樹木の枝を取り除いて、一本一本を馬を使って麓の集積場まで運んだ。全く命がけの重労働であった。この労働にもノルマがあった。年取った兵士では到底ノルマを果たすことができないので、若い兵士と組んで助け合い、気合をいれ掛け声をかけ合いながら労働を続けた。一方ソ連の歩哨はぬくぬくとしたオーバーをまとい、長いフェルトの靴をはいて、とても暖かい身なりであった。そして大声で早く仕事をせよとどなった。

負けた者のみじめさとくやしさを、悲しさを心の底から味わった。この事実は忘れられない。

チター地方で亡くなった戦友を弔う。

年を取った戦友の多くは日ごとに衰弱し、肌の色つやもなく、体全体に紫斑点ができて唇も紫色になり病死していった。共に労働してきた兵士が今日も一人、

また一人亡くなっていった。私は次は俺の番かとも思
った。

この方々には妻や子供が父の帰りを待ちわびていた
ことだろうと思うと残念でならなかった。私は小さい
ころから習っていたお経を宗派をこえてとなえて合掌
した。シベリアの凍土を掘り起こすがツルハシが立た
ない。そこで白樺の木肌をはぎ枯れ枝などに火をつけ
て、地面を暖めて穴を掘った。そして亡き戦友を毛布
でくるんでねんごろに吊ってあげた。生き残りの者が
周りを囲んで合掌し、今は亡き戦友の冥福をお祈りし
た。盛土をして辺りの小石を拾い集めお墓がわりの墓
標にしてあげた。さぞかし無念であったにちがいない
と今でもこの事を思い出す。

私は自分に何度となく言い聞かせた。「何くその
シベリアで死んでたまるもんか。必ず生きて帰るの
だ」と。これが悲願であった。

酷寒の中での伐採労働をやつと終わった我々は、集
団農場と国営農場での労働をさせられた。私はこれま
でに大切にしてきた腕時計や、化粧石けんまでも手放

して、黒パンと取り替えてしまった。これも飢えとひ
もじさをしのぐための残されたたった一つの手段であ
った。これらの農場ではじゃがいもと、トマトの植付
け作業と収穫をする労働であった。真つ赤な夕日が地
平線に沈むころまでも作業は続いた。鍬一本で土を耕
して中腰で、じゃがいもの植付け作業なので腰が痛む。
この作業もノルマがあつてこれを果たすまでは薄暗く
なるまで働かされた。収容所に到着するころには辺り
が真つ暗になっていた。発熱しても三八度以上の高熱
がでなければ労働に駆り出された。休日などはほとん
どない。休日は入浴をするが、浴場は屋外なので春で
も寒い。浴槽は棺桶ぐらいの箱を作り、その中に炊事
場から湯をもらつてその中に入れる。まるで行水する
のと何ら変わりはない。これでは疲れがとれるはずが
ない。そのほかに休日には下着の洗濯、被服の修理、
ストーブに入れる薪づくりの雑用に追われる。休日と
は名ばかりで、若い我々でさえも疲れきつた終日であ
った。その上、地上労働なので黒パンの量も採炭夫の
ときの半分の三百五十グラムであった。

蛇や蛙などは平気で食べた。じゃがいもとトマトの収穫がすむころは既に晩秋であつた。

昭和二十三年の早春、我々は鉄道付設の過酷な労役についた。伐採した丸太が貨車で運ばれてきた。その後からレールが運ばれてきた。丸太やレールを肩にかついで付設する場所に運ぶ。地面は平らでないので粘土混りの土を運ぶ。ムシロで担架を作つて土を運んでいく。若い我々が運搬役になり、年を取つた方は入れ方にまわつた。両手、両腕はシビレている。肩や肘そして足やヒザにも痛みが走る。腕を振つたり、もんでみだが回復はしない。完成したときの喜びなどは少しもない。牛馬同然に強制労働をさせられたことしか今も頭に残っていない。我々は異口同音に「死ぬ道は今日でもある」、しかし、「生き抜く道は一つしかない」と。気弱になつたり、気力がなくなつたら死ぬ道しかないのだと互いに励まし合いながらこの労働を耐えぬいたのである。

屈辱をうけた出来事は今も忘れられない。この鉄道付設労働したときの出来事である。

だれしも懐かしい思い出の故郷がある。その故郷での子供のころの思い出話に花が咲く。「早く故郷に帰つて正月餅や、おこわ、よもぎ団子などを食いたいのう」、「俺たちはいつになったら帰してくれるのかのう」、そして「いまだれのために働かされているのかのう」とか、「毎日がただ働きで、その上食い物だつてないのう」と話していた。すると私の耳元に口をあてて、「めつたなことを言うなよ」と隣の者から口止めされた。がもうその時は遅かつた。

ところが、その晩数人の日本兵のリーダー格がこう言つた。「同士諸君に言う。昼休みの折あのようなことを言つた者を日本に帰らせてはならない。云々」我々数人の者は土下座をして詫びた。その場は一応すんだが、私は釈然とはしなかつた。それも連日の重労働で明日の命もわからない中でこともあろうに、日本人の捕虜同士がこれほどまでも互いにいためつけ、人を陥れるのは一体なぜなのであろうか。捕虜同士の間にもう信頼感とか友情のカケラさえもなくなつてしまつていた。思えば思うほど憤慨の情がこみあげてきた。

一刻も早く日本に帰りたいという切なる祈りと願いからなのに、決して人様に迷惑をかけたり、相手を傷つけた言葉ではないのに。戦後五十年を迎える今でも私の胸の奥底にはあのときに吊しあげにあった苦悩の「心の傷」を忘れないが、いまだに忘れられない。

製材工場でのロシア人との出会い

我々の混成部隊の一行はウラジオストクに程近い製材工場で労役をする事になった。ここでの作業はコンクリートをつめる型枠づくりであった。この職場長の「ノーダイモク」さんは、我々を常にいたわってくれていた親日派のロシア人であった。彼はこう言った。「あなたたちの今の仕事量では今日のノルマは到底できない。だからあなた方の仕事を私がしてあげよう」といわれて釘を口の中に入れた。そして口から釘を出し、金槌を使って見事に型枠を仕上げていかれた。我々はあつけにとられていた。彼は自分の仕事のように次々と仕上げていく。見とれていたのはいけなと我々も頑張った。おかげでノルマを果たした。

ノーダイモクさんは、「あなたはタバコが好きね」

と言って私のズボンの両方のポケットにソ連のタバコ（マホルカ）をねじこんで「あなたの仲間と吸いなさい」と言ってくれた。四年間以上もどなられながら労働させられたことなどを思い出すと、何とロシア人の中にもこんな温かい方がおられたのだなあと思った。今もありがたい気持ちでいっぱいである。休み時間に彼はこう言った。「日本では多くの老人が生きていますね」と私に問うた。

このとき、私はなぜこのようなことを尋ねるのであろうかと不思議に思った。逆に考えれば老人になるまでに亡くなっていくのだということを、私に暗にほめかけたのであろうかと。

日本では老人を敬いそして慕う。がしかし、抑留中に老人をいたわったりする姿をあまり見うけなかった。この国は何かしら尚齒の心が少し薄いお国柄とも思ったこともあった。点々と収容所ぐらしを続けて、既に四年以上にもなった。ほんとうに我々を復員させてくれるのかと日一日と疑う気持ちが強くなってきた。この労働が終了後、どこに行くのだろうか、と。

昭和二十四年七月、貨車の連結作業

このころ我々はウラジオストックで貨車の入れ替え、連結作業についた。一人の歩哨が我々の方に近寄ってきてこう言った。「ニエツトダモイ」と告げた。我々を帰国させないと帰国できないとも受け止められるこの言葉を聞いて愕然とした。同僚は「俺もここで死ぬ」とまで言った。ある兵士は「走ってくる車両に飛び込んで死ぬ」と言った。まさに修羅場と同然だ。人間は極限に達すると死を少しも恐れない。

復員命令と、乗船命令が出る

昭和二十四年四月末、復員命令を受けた我々は、ナホトカ港へ集結するためウラジオストックを後にした。ソ連の係官が乗船名簿を見ながら氏名を読みあげる。だれ一人として微動だにしない。「スコーラダモイ」の言葉をもう何年間も聞いたことか。乗船が開始されて一歩、また一歩と船のタラップを踏みしめて上っていく。喜び勇んでいる兵士はだれ一人としていない。苦節四年六カ月間の長くて辛い苦しい思いをかみしめていた。事故や病氣、飢えと寒さで死亡した多くの友

を思うと胸がはり裂けんばかりであった。船内で数人の兵士が「この野郎、畜生」と絶叫した。どの兵士も堪忍袋の緒が切れた思いで、そのうつぶしが爆発したのであった。栄豊丸は昭和二十四年七月二十九日、ナホトカ港棧橋を離れて一路舞鶴港をめざして航行した。そして八月一日舞鶴港がくつきりと見えた。復員兵士は一斉に甲板に上がり一人残らず号泣したのであった。

舞鶴港の引揚げ棧橋で温かく歓迎

地域の方々、小中学生のみなさん、婦人会の方々や多くの方々が手に手に日の丸の小旗を振っていた。横断幕やプラカードなどもたくさんあった。その中にはお年寄りの方や、我が子を連れた妻の姿もあった。老夫婦の中にはこの度も我が子がいないとわかって泣き叫ぶ姿を見て胸がいたんだ。私の祖父母の姿はなかった。たとえようもない悲しみに私は泣いた。仏前で祖父母の霊に深々と頭を垂れて先祖の御加護と、御慈悲に心から感謝した。

復員後、町の港に流れた歌はあの「異国の丘」であり、「岩壁の母」であった。それらの歌詞が強制抑留

の姿や、望郷の念そして悲願そのままである。私にとつては痛いほどよく分かった。

復員後、自分の進む道を求め続けた。生命と体だけはやっとの思いで持ち帰ったが、この先どうやって生きていけばよいのか一寸先は真つ暗闇であった。私の心の底にただ一つだけ強くあつたものは教職への道であった。

知人などを頼って努力したが、この道に進むことはできなかつた。ある日私はこう考えた。「そうだ俺はあのシベリアで死んでしまったのだ、死んだ気持ちでこれから先やっていけばどんなことだってできる」、希望への道にたどりつくまではどんなにつらい仕事でも試練と考えて、土木人夫になることを決意した。

この仕事は砂船に積みこんである砂を陸地まで運搬する重労働であった。砂を二つのザルに入れて肩に担ぐ。水を含んだ砂は重い。慣れないので船から陸地にかけてあるアユミから足をすべらせて砂を担いだまま、何回も船と岩壁の間の海に落ちた。この仕事を一日も休まず八カ月間も続けた。とてもつらかつた。

お陰で翌年の昭和二十五年四月に教員に採用され、定年まで職責を全うさせていただき心から感謝している。そして歳月は流れた。

数多く報道などを通して昔を回顧

平成二年九月二十三日、NHKテレビで「シベリア・バイクで行く」の報道を見聞きして思ったことは、当時の我々にとつてはそんな楽しい旅ではなく、正に生命懸けの強制労働のまっただ中であつた。それだけにうらやましかつた。

平成六年三月二十五日に香月泰男氏の「シベリア原・点展」を見た。一枚一枚の絵画には抑留体験されたもので私自身が体験してきた事実と全く同じであつた。当時を思い出してとめどなく涙が出た。心から御冥福を祈つた。

続いて五月八日、TBSの報道特集を見ると、我々が復員した当時の引揚げ桟橋は既に工業団地となり、引揚援護局も時代の推移によつて様変わりしている。私はこの番組を見て昔を思い出し熱いものがこみあげてきた。

平成六年七月八日NHKテレビで陸軍歩兵第七十七連隊がレイテ島で壊滅されたとの報道があった。私はこの連隊に所属していた。私が発疹チフスで入院したのも、この陸軍病院であった。私を常に激励してくれたN曹長さんと、i軍曹さんもあの地で戦死されたのだと思うと、残念の極みである。心から御冥福をお祈りした。戦死された多くの方の霊をなぐさめるために七月十日に「空中供養」をされたという詳しい記事が中国新聞に掲載された。

更に、平成六年八月十四日NHKテレビで「シベリア抑留はこうして行われた」という報道があった。ソ連上層部は自国の復興と繁栄を目的に、日本人、捕虜五十万人を決定し、捕虜を各地に分配し無償で強制労働をさせたという。何と非人間的な行為を受けたことかと思うと憤慨に堪えない心情である。何十万人もの捕虜をかかえたために食糧事情も限界に達して栄養失調、チフス、結核患者が多く続出して死亡したという。病死された方々はもちろんのこと、その御遺族の心中を思うと無念であったにちがいない。お気の毒な

ことである。

終わりに臨んで

強制抑留をこの五体で体験した私は、一朝一夕にしてその「心のいたみ」を消すことはできない。こうして生還できたのは気力と体力もあった。しかし、私は今でも神仏の御加護と御慈悲のお陰だと信じている。

もしも万一、生きて帰れることができたならば、この「小手記」をまとめることが私の悲願であり執念でもあった。「語り継ぎ伝えたい願い」と「遺しておきたい祈り」からまとめた。この先もたくましく生き抜いていきたい。

【執筆者の横顔】

宮田榮一氏は朝鮮京畿道仁川府生まれ、三歳で両親が死亡。同じ仁川で薬局を営んでいた祖父、祖母のもとに引き取られた生粋の朝鮮育ちである。次に伯父が海州港で造船所を経営していたので、伯父のところに移って世話になった。中学を卒業後、京城師範に進んだ。

昭和二十年四月、陸軍歩兵第七十七連隊に入営し、

八月十五日平壤の部隊で終戦、武装解除、貨物船でシベリア抑留となった。途中列車の窓に幕をおろしてあるのでどこをどう通過したのか分からなかったが、十二月末アルチョムの炭坑の町に着いた。二十四年まで炭坑や伐採、農場での労働にしていたが、その間、年取った戦友が衰弱し、次々と病死していった。牛馬同然に強制労働させられたことは、生涯忘れられない。弱になり気力がなくなれば死んでいく実情を宮田氏はしみじみと感じた。ウラジオストックでは、製材工場で労役。ここでは初めて、温かい気持ちで常にいたわってくれた職場長に出会った。昭和二十四年七月末、復員命令を受けた。苦節四年七カ月を経て、ようやく日本への引揚船に乗り移ったとき、地獄から娑婆へ抜け出した心境であつたらう。

異国の丘、岩壁の母の歌が流れる舞鶴港では温かい歓迎を受け、祖国の有り難さで感激する。復員して、教職の道に進みたかったがすぐにはできず、シベリアで死んだ気持ちでも試験と考えて土木人夫にもな

つた。

昭和二十五年四月、ようやく教員に採用されたときは、京城師範に入れてくれた伯父のお陰と心から感謝した。定年まで職責を全うし、生活の安定を家庭の平和を保ち得たことは、祖国の有り難さと感謝している。宮田氏はシベリア抑留から生還できたのは、気力と体力と、神仏の加護の三つだったと振り返るのである。

(社)引揚者団体全国連合会

副理事長 結城 吉之助)

北朝鮮から

鹿児島県 後藤 基 憲

終戦の前日昼過ぎ、駅前派出所の主任が私の事務所に入ってくるなり、「後藤さん戦争は負けました」と言うから、「何を言うのか、君は警察官だろう、流言飛語を口走つたらあかんじゃないか」とどなつたら、「いいや、後藤さん本当なんです。署長が日本人警官